

音楽能力の発達段階を踏まえた小学校音楽科授業の試み —異学年交流による相互学習を通して—

遠藤 泰志* 北岡 玲伊* 新山王 政和**

*附属名古屋小学校

**音楽教育講座

An Attempt at Elementary School Music Classes Based on the Developmental Stages of Musical Ability — Based on mutual learning through interactions between different grade levels —

Taishi ENDO* Reii KITAOKA* Masakazu SHINZANO**

*Nagoya Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0072, Japan

**Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords：音楽科授業 異学年交流 発達段階

本報告書は、Ⅰを実践者の遠藤泰志が執筆、Ⅱを実践者の北岡玲伊が執筆し、Ⅲを共同研究者の新山王政和が執筆している。

Ⅰ 遠藤泰志による3年生、5年生、6年生 を対象にした研究実践（遠藤執筆）

(1) ねらい

《はじまりの歌》の旋律や歌詞などを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、聴き取ったことと自分達の歌唱表現との関わりについて考える姿を目指して授業を行った。資質を高める手立てとして、異学年との交流を設け、楽曲分析を共有する場を設けることにした。

異学年と交流する取り組みは初めてだったので、今回は2つの試みを行った。まず、6年生が楽曲分析を行い、それを5年生にわかりやすく伝え、互いに理解し合う活動。2つ目は、3年生が自分達の表現したい気持ちや知りたいことを伝え、6年生が適切にアドバイスする活動である。これらの活動を通じて、上の学年は、自分達の知識をより深めたり、相手の考えを理解しながら表現方法を探したりすることができる。また、下の学年は、上

の学年より新しい知識を得て、楽曲に対する見方を広げることができる。そうすることによって、自分達の学年の中で行うよりも効果のある議論ができると考えた。

(2) 研究実践1の報告

〔10月〕5年生×6年生（5・6年生両方の視点からの報告）

題材名『はじまりの歌』

①活動1

5・6年生で合同合唱を企画し、6年生がどのような視点で曲を理解して歌っているかを5年生へ教える授業を行った。6年生にとっても5年生にとっても初めてとなる交流授業で、どうしたらよいかかわらず、試行錯誤の日々だった。場所、時間配分、役割分担など、児童が授業に必要なことを自ら考えて、率先して行った。

②活動2

題材の楽譜には、今まで習ってきたことを基に、5年生に自分達なりの曲の解釈を伝えるための準備をした。まず、班ごとに分かれて楽譜に「歌詞からわかること」「楽譜からわかること」「自分が気に入っているところ」「作曲者の思いを感じる場所」「その他」に

分けて、色を変えて付箋を貼っていき、楽曲分析を行った。それらを学年で集約し、6年生としての考えをまとめた後に、5年生に対して何を伝えるのかの相談を行った。

③活動3

5年生との交流授業を行った。それぞれ班に分かれて5年生に曲想について確認をした。6年生なりに考えた曲への思いを5年生に伝えることができた。5年生も自分達が今まで持てなかった視点から曲に対してアプローチすることで知識を広げることができた。



(3) 研究実践2の報告

〔11月〕3年生×6年生（6年生の視点からの報告）

題材名『歌よありがとう』

①活動1

6年生は、5年生との関わりを通じて学んだことを基に、3年生と授業を行った。今回の授業は、合同合唱をするわけではないので、3年生の思いを受けて、アドバイスを送るという流れで行った。前回の交流とは違う想定に対応するための、時間配分や場所、役割分担について話し合った。

②活動2

3年生には歌うことを通じて、誰にどんな気持ちを伝えるかを考えてもらい、6年生にどんな質問がくるかはある程度事前にわかるようにしてあった。しかし交流を通じて話が広がることで、予想していない質問がくることも考えられる。そこで、その場でどのようなことを質問されてもいいように、念入りに楽譜への書き込みを行い、交流へと備えた。

③活動3

3年生との交流授業では、今までの学習を生かして交流をすることができた。3年生か

ら思いを聞いてアドバイスすることは、自分達の演奏表現を自分達なりに作るという活動とは違い、他の人の思いを表現するというより高い技術が求められる内容となった。



Ⅱ 北岡玲伊による1年生と4年生を対象にした研究実践（北岡執筆）

題材名：第1学年「いいおとみつけて」

第4学年「音楽今昔」

(1) ねらい

楽器には、様々な演奏法がある。また、作曲者が楽曲に使用する楽器を選ぶ際、特に打楽器においてはその曲調に応じて選定する。曲の中で、なぜ各楽器が用いられているのかを考えることは、曲を演奏または鑑賞する際にとても重要なことであると考え。そこで今回、楽しい、悲しいなどの様々な「きもち」を楽器の音で表すには、どのような楽器でどのような方法で演奏すれば良いかを考える実践を行った。

その際、楽器の演奏方法に対する知識や思いを深めるために、1年生と4年生を交流させて授業を展開することにした。

今回の実践では、1年生が様々な「きもち」を考えて、それに合う楽器の音を考える場面を交流授業に設定した。その際、4年生が1年生の楽器選びのサポートを行う。

交流授業に向けて、両学年で十分な事前学習を行う必要があると考えたので、以下の実践を事前に行った。

(2) 1年生の事前学習

①事前学習1

まず「ねこのなきごえであそぼう」の教材を通して、自分の「きもち」を声に出して表す活動を行った。児童は、「楽しい気持ちは

大きな声で表すと良い」「悲しい気持ちは低い声で表すと良い」など、「きもち」を表す声を、音の強さや高さといった要素を使った言葉で表していた。「にゃーにゃー」といった猫の鳴き声だけを使って会話をする活動では、声の強さや高さを工夫しながら、児童同士で楽しそうにやり取りしていた。

②事前学習 2

まず、楽器の名前や基本的な演奏方法を学習した。その後に、好きな楽器を使って児童同士会話のようなコミュニケーションをとる活動を行った。

楽器の音だけでコミュニケーションをとることは初めての体験で難しそうな様子であった。この活動を通して、自分の意思や感情を楽器の音に変換することを体験していくことができた。

③事前学習 3

次に、今まで経験したことのある「きもち」を想起させ、楽器の音で表したい「きもち」を考える活動を行った。

考えた「きもち」を表す音はどんな音になるのかを、強さや速さ、高さに注目して考えた。考えた「きもち」は『きもちカード』に記入し、合いそうな楽器をいくつか予測して挙げさせた。児童は『「たのしい」』には大きな音が合っていると思うからビブラスラップがいいと思う』『「かなしい」』には低い音が合っていると思うからバスドラムがいいと思う』など、今までの楽器の経験を頼りに、使えるような楽器を予測していた。

(3) 4年生の事前学習

①事前学習 1

まず、楽器の色々な演奏の仕方を見つけ、学習プリントに記録していく活動を行った。

児童はクラベスで「縦にして叩く」「こする」「弱く叩く」など様々な演奏方法を見つけたり、バスドラムでバチを変えて演奏して音を聴き比べたりするなど、1つの楽器でも色々な音が出せることを活動の中で発見していった。

②事前学習 2

1年生が作成したきもちカードを見て、交流授業の時にどのような楽器と演奏方法を提案するかを検討した。

児童は、1年生のきもちカードをみて、「きもちカードには『たのしい』きもちを表すのにビブラスラップが良いと書いてあるけど、トライアングルを強く、連続で叩いても良いと思う」など、1年生が考えた「きもち」に合う楽器を交流授業でたくさん示そうと考えを巡らせていた。



(4) 交流授業

交流授業では、1年生と4年生でペアを作り、2人で対話をしながら1年生が考えた「きもち」に合う楽器を探していった。

4年生は、『きもちカード』に書かれている「きもち」について1年生に詳しく聞いたり、1年生が予測した楽器以外にも使えるような楽器を提案したりして、1年生と積極的にコミュニケーションを取りながら活動している様子であった。

1年生は、「バスドラムは柔らかいバチではなく、木の固いバチで叩くと違った音を出すことができるんだよ」というような4年生の提案を興味津々に聞き、楽器の演奏方法に関する知識を深めている様子であった。



Ⅳ 共同研究者の所感（新山王執筆）

(1) ピアジェ「認知的発達段階」の確認

① 2～7歳「前操作期」

自分が抱いたイメージに基づいて、区別ができるようになる。保存性は未発達。

② 7～11歳「具体的操作期」

論理的思考力が発達し、他者の気持ちを考えて発言できるようになる。保存性を習得。

③ 11歳以降「形式的操作期」

具体的なものから特徴を捉えて抽象的に整理できるようになる。知識と経験を応用して仮説を立て、結果を予想して考えることができるようになる。

これによると、低学年ではイメージをもつことはできても、それを記憶・保存することができず、そのイメージを基にして学習活動を継続することは難しいことがわかる。そして中学年では他者の考え方を探り、再現可能なように記憶・保存する力を獲得する段階にあり、高学年では特徴的なことを捉えて抽象化して一般化したり、それまでに獲得した知識と経験を応用・転化したりして、結果を予想しながら創意工夫ができるようになる。よって異学年交流による相互学習には、それぞれの学年における学びがあり、教育の面だけでなく音楽能力の発達の面でも意味がある。

(2) 音楽科における「知識の発達段階」

「知識」も獲得段階があるため、異学年交流の相互学習では発達段階に即したそれぞれの説明の仕方や伝え方があり、“自分ごと”として自分の目線で理解して再確認ができる。

① 覚えればわかる知識 [レベル 1]

楽語や用語、作曲者、曲の背景など、教師の指導を受けたり教科書やネット等で調べたりしてわかるもの。知識の無いまま考えさせたり感じ取らせようとしたりすることは難しく、子供が自分で考えて自然に理解できるものでもない。楽語や用語については言葉の丸暗記に止まることなく、音楽の文脈の中や曲の中で意識させることが大切。

② 聴き取ることでわかる知識 [レベル 2]

音楽の諸要素やその変化について、音や音楽の印象と結びつけることで理解するもの。

知覚（気づくこと）を拠り所として、音や響きの変化と関連して理解させることが大切。

③ 感じ取ることのできる知識 [レベル 3]

音楽の要素やその変化から、雰囲気や曲想の関係を感じ取ることによって理解できるもの。音楽活動の中で要素の知覚と要素の働きとを結び付けることによって理解できるようになる。上記②の「知覚（気づくこと）」と③の「感受（感じ取ること）」は組み合わせて学習する。現実には、知覚はできても感受することのできない子供が多い。

④ 学習過程を経てわかる知識 [レベル 4]

既習の知識を子供自身が結び付けたり関連付けたりして自分なりに整理して構造化し、理解したことを組み立て直して再構築する。新たに理解した知識は、自分自身のものとして更新（獲得）されていく。

(3) 音楽科における「技能の発達段階」

「技能」にも獲得段階があるため、異学年間の学び合い・教え合いには意味がある。

① 再現できる力：使える技能 [レベル 1]

知っているだけでなく、必要な時にそのやり方や演奏法を再現できる力。録音等で客観的に自分の状態を把握させることが大切。

② 活用できる力 [レベル 2]

自分で考えながら、上記①で身に付けたやり方や演奏法を試したり活用したりする力。

③ 応用できる力 [レベル 3]

自分なりの演奏法を試しながら“よりベターな方法”を見つけ出して、応用できる力。

④ 使い分けることのできる力 [レベル 4]

新たに獲得した知識を自分なりに整理して、自分の捉え方として構築し直す。そして自分のやり方として更新していく。上記②③で試したり身に付けたりしたやり方を、自身の思いや意図に沿うように使い分ける力。

⑤ 新たなやり方を探し出す力 [レベル 5]

上記①～④を行ったり来たりして取捨選択しながら、自分のやり方を創出する力。